様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 19 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９８２００４０
研究課題名（和文）　ｅｘｔｅｎｓｉｏｎという概念の変容に着目したサイボーグ技術に関する思想の研究
研究課題名（英文）　Research on ideas concerning cyborg technology by focusing on transformations of the concept of extension

研究代表者
柴田　崇（SHIBATA TAKASHI）
映画専門大学院大学・映画プロデュース研究科・助手
研究者番号：１０４５４１８３

研究成果の概要：extension という概念は、身体との関係から技術を記述してきた歴史がある。本研究は、extension に少なくとも三つの内包があることを出発点に、サイボーグ技術を複数の extension の系譜に位置づけ、それ以前の技術の記述との差異から、その特性を理解する点を特徴とする。2007～2008 年度は、系譜の特定に必要なレファレンス作りを中心に、系譜学の適用と方法論としての精緻化を進めた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	660,000	0	660,000
２００８年度	660,000	198,000	858,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,320,000	198,000	1,518,000

研究分野：メディア論，技術思想史，サイボーグ論
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：技術思想史，技術哲学，サイボーグ，extension，メディア，メディウム，McLuhan，Gibson

１．研究開始当初の背景

Ｍ・マクルーハンの研究を通じて、extension には「身体を延長するもの」「身体の機能を拡張するもの」「身体から外化したもの」の三つの内包があることが明らかになった。各々の概念の起源を特定し、変遷を追跡することで当該技術の特性が理解できるという見通しから、サイボーグ技術についての記述を「拡張」の系譜から読み解いたところ、特にコンピューターとの比較で有意な差異が見られた。そこから、「延長」と「外化」も加え、サイボーグ技術の総合的な理解を皮切りに、extension に着目した系譜学的方法の確立の研究に着手した。

２．研究の目的

（1）レファレンスの作成

；このような系譜学的方法の成功は、参照資料の豊富さに左右されるため、extension に関するレファレンスの蓄積が必須である。これまでに三つの extension を分節し、それ

ぞれの起源を特定してきたが、第四の系譜が存在する可能性を排除しないように留意しつつ、レファレンス作成の作業を継続する。

（2）適用
；サイボーグ技術をターゲットにする研究には、対称軸となるそれ以外の技術を理解する作業が含まれる。したがって、extension で記述されてきた技術全般を対象に、系譜学を適用する作業を行う。

（3）方法論の確立
；extension によって技術の特性を記述するやり方自体を対象化し、同じ概念で記述する場合にも不可避的に生じる差異に着目するところから、技術の特性を理解する方法論を確立する。

３．研究の方法
（1）レファレンスの作成
；レファレンス作成には相当量の資料に目を通すことが不可欠だが、文献の闇雲な漁渉はデメリットが大きい。さらに、系譜学という方法論の有効性を上げるためにも、「原型」とサイボーグ技術の間にあり、系譜上、重要な意味を持つ「結節点」となる思想を特定し、それらの結節点を中心に資料の収集と分析を進める。尚、ここで言う文献には、文字で書かれた資料以外に、映像作品、サイボーグ技術が開発されている現場の声も含む。

（2）適用
；サイボーグに限らず、extension の登場する道具論、技術論、メディア論、さらに、SF を中心にした文学作品やアニメーションを含む映像作品、現場の声を対象にする。

（3）方法論
方法論の構築には、第一に、extension の系譜に定位した思想家と技術状況の二項関係に加え、当時の思想に影響力を持った理論状況に目配せすること、第二に、「原型」に定位する一方、「原型」の論理を批判的に対象化する思想家の登場にも注意することが必要である。後者は、系譜の「結節点」としてそれ以後の思想に大きな影響を及ぼすだけでなく、全く新しい系譜が形成される可能性があり、系譜学上、極めて重要である。

４．研究成果
1）レファレンス
；2007 年度中に、S・バトラーの『エレホン』（1872）とJ・D・バナールの『宇宙・肉体・悪魔』（1929）という「拡張」の系譜の指標になる作品を特定する成果が上がった。前者では機械の進歩が人間の進化のスピードを凌駕する不安が描かれており、後者では機械との接合による人間の人為的な進化が主題になっている。蒸気機関の発明を背景に機械を一種の生物種と見なして進化を論じる前者は、生物と機械の類推を基調にする。他方、J・B・S・ホールデンの生物遺伝学に触発された後者は、人為的な「改良」の操作が機械だけでなく人間にも適応できる（適応されるべきである）という発想を基調にする。後者の発想は、今日のサイボーグ論の一翼を担うK・ウォーリック（2002）の発想の「原型」になっている点で特に興味深い。バナールの思想は、今日のサイボーグ技術の特性を解明する「原型」の役割を果たしていることがわかった。

（2）適用
；extension をめぐるM・マクルーハン、E・T・ホール、R・B・フラーの間の論争を整理し、マクルーハン研究に新しい解釈を提出した「マクルーハンの extension のオリジナリティーについて」と、J・J・ギブソンのメディウム論が、デカルトに起源を持つ「延長」に定位しつつデカルトの心身二元論を覆す可能性があることを、同じくメディウムに着目した同時代の F・ハイダーの心理学説、さらに通信モデル、サイバネティクスという理論状況に目配せしながら解明した「ハイダーとギブソンのメディウム概念」の二本の雑誌論文に加え、extension を切り口にマクルーハンとギブソンのメディウム概念を比較した学位論文（「20 世紀におけるメディウム概念の成立と変容」）を発表した。

（3）方法論
；論文「ハイダーとギブソンのメディウム概念」において、「当時の思想に影響力を持った理論状況」としてシャノンとウィーバーの通信モデルを、「『原型』の論理を批判的に対象化する思想家」としてギブソンを特定することで、方法論の精緻化を進めた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 柴田崇、ハイダーとギブソンのメディウム概念、生態心理学研究、第 5 巻、印刷中、2009 年、査読有
② 柴田崇、マクルーハンの extension のオリジナリティーについて－論争と再考、カナダ研究年報、第 29 号、印刷中、2009 年、査読有

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
柴田　崇（SHIBATA TAKASHI）
映画専門大学院大学・映画プロデュース研究科・助手
研究者番号：１０４５４１８３

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし